令和6年度さとうきび・甘蔗糖関係検討会の概要

那覇事務所、鹿児島事務所

はじめに

当機構では、沖縄･鹿児島両県のサトウキビ生産･糖業関係者が一堂に会し、サトウキビおよび甘蔗糖（かんしゃとう）をめぐる最近の話題や情報を共有するとともに、それぞれの現場で抱える諸課題を一丸となって解決していくことを目的に、「さとうきび・甘蔗糖関係検討会」（以下「検討会」という）を開催している。

今年度のトピックとしては、時間外労働の上限規制などに代表される働き方改革関連法の適用が猶予されていた沖縄・鹿児島両県の製糖業でも、令和６年４月から上限規制の適用が開始されたことが挙げられる。24時間操業を主とする製造現場では、地域の人口減少と高齢化により人材確保の難易度は同法が施行された当時に比べ、格段に厳しい状況下にある。

そこで、今回の検討会は「人手不足時代をいかに乗り越えていくか～地域とさとうきび生産を守るためにできること～」をテーマに掲げ、令和６年９月26日、那覇文化芸術劇場なはーと（沖縄県那覇市）にて開催した。沖縄県および鹿児島県を中心に、生産者、生産者団体、製糖事業者、行政機関、試験研究機関など200人余りが参加して行われた今回の検討会の概要は、以下の通り。

1　基調講演

まず、農林水産省より「砂糖をめぐる現状と課題について」の報告が行われた。続く基調講演では、東京農工大学大学院農学研究院の新井祥穂教授から、「働く側から見た『働き方改革』～労働者から選ばれる仕事場になるために～」と題し、農作業の現場や製糖工場で働く季節工と呼ばれる日本人労働者と外国人技能実習生へのヒアリング調査を基に、それぞれの就労の目的や仕事に対する考え方の違いなどについて表１の通り報告が行われた（写真１）。

表１　就労の目的や仕事に対する考え方の違い

日本人労働者	外国人労働者
・多様な働き方が広がり、非正規雇用に対する雇用環境が整備された結果、非正規として働き続けることに対する抵抗感が薄れつつある。 ・労働者のボリュームゾーンは、就職氷河期以降の20代～40代が中心。 ・季節ごとに住まいを変え、都市圏と農村部を往復する働き方。 ・製糖工場での勤務は、①賃金が安定している②居住の場所と食が確保されている③近年、都市部との賃金格差が縮まっている－などの理由から、魅力を感じている者が多い。	・非農家出身で、高学歴層が中心。特に、インドネシア人の技能実習生は、日本語の上達が早く、日本の習慣や文化に早く適応する者が多い傾向にある。 ・就労目的は、自国の家族の生活費の援助のためというより、家族の教育資金または自身の起業資金を獲得するため。すなわち、技能実習生は「安くても働く」というステレオタイプな外国人労働者像ではない。 ・アジア通貨危機で不遇な時代を経験した35歳以上の世代は、自国より魅力を感じる国の一つとして、日本での就労を希望する者もいる。

写真１　講演を行う新井教授

2　テーマに関する取り組み報告

第一線で活躍する企業および生産者から、今回の検討会のテーマに沿って、より多くの働き手を国内外からいかに呼び込むかという視点のみならず、優れた技術の伝承や農作業におけるムリ・ムダ・ムラを解消することによる生産性向上など、人材確保以外の方策・視点も交えながら、具体的で実現可能性のある解決策や、そのヒントについて講演いただいた（表２、写真２）。

表２　講演の概要

講演者	タイトル・概要
日本甜菜製糖株式会社 美幌製糖所 次長　　佐藤　晴彦 農務課長　　板垣　真二	**「JAおきなわと連携し、製糖工場で働く人材を相互出向」** 同社の製糖期（10月～翌１月）における作業員不足を補うため、沖縄県の製糖工場との作業の類似性と季節による繁閑の差に着目し、JAおきなわ伊是名製糖工場と連携し、相互で従業員を出向させる取り組みについて紹介。
JAおきなわ さとうきび振興部 次長　　宮平　浩史	**「北海道・愛媛のJAと連携　～農作業アルバイトをリレーでつなぐ～」** 農産物の収穫期が重ならないJAふらの（北海道）、JAにしうわ（愛媛県）、JAおきなわの三者で協議会を設立し、それぞれの産地で働く季節労働のアルバイトをリレー方式であっせん・融通することでリピーターを増やし、労働力を安定的に確保する取り組みについて紹介。
南西糖業株式会社 取締役　　廣　敬造	**「列島縦断3000キロメートルの労働力交流」** 建設機械・重機などの免許・資格を保有する優秀な人材をつなぎ止め、周年雇用するため、閑散期で労働力が余剰となる夏期に、繁忙期を迎える北海道にトラックドライバーや収穫オペレータとして人員を派遣する取り組みについて紹介。
第１回キビ１グランプリ 最優秀賞　　開　孝行 （代理講演　喜界町役場 主査　　中山　勝史）	**「さとうきびは、奥さんの次に愛している」** 作業日誌を基に独自のマニュアルを作成し、作業の目的や手順、時間などの情報を「見える化」させたことで、農作業に充てる時間を削減することに成功。家族団らんの時間を楽しみながら農業を営む開孝行氏（喜界町）の取り組みについて紹介。
伊是名村農業委員会 会長　　神山　勇太朗	**「さとうきび生産、はじめました　～29歳の挑戦～」** ピーマン生産を主としていた同氏は今年、祖父からサトウキビ圃場（ほじょう）を引き継ぎ、サトウキビ生産との複合経営に着手。地域農業のリーダーとしてさまざまな活動を行いながら、自身の農業経営を軌道に乗せるための日々の奮闘や将来の展望について紹介。

写真２　講演に耳を傾ける参加者

3　話題提供

サトウキビや甘蔗糖、砂糖に関する最近の話題やトレンドについて、以下の通り講演をいただいた。

（1）一般財団法人肥料経済研究所　専務理事
　　春日　健二
　　「肥料をめぐる内外の情勢と国内資源の活用について」

（2）スイーツジャーナリスト®　平岩　理緒
　　「世代を超えて愛される沖縄・鹿児島の郷土菓子の魅力と今注目のスイーツ～未来と世界に伝えたい、ご当地＆日本発スイーツ～」

4　現地視察

検討会の翌日（９月27日）には、検討会の参加者を対象に、サトウキビ生産に対する理解をより一層深めていただくため、以下の通り現地視察を実施した（写真３）。

視察時間は、およそ３時間とやや短めであったが、参加者からは「とても有意義だった」「リアルな現場を知ることができて勉強になった」など好意的な意見・声が数多く寄せられた。

（1）参加人数　約100人

（2）視察先

ア　サトウキビ生産圃場（沖縄県南城市）

イ　地下ダム（同八重瀬町）

ウ　沖縄県農業研究センター（同糸満市）

写真３　地下ダムを視察する参加者

おわりに

検討会終了後、アンケートを行った結果、講演内容について「とても参考になった」「ある程度参考になった」を合わせると、98％の回答者が参考になったと回答した。

これもひとえに、ご登壇いただいた講演者の皆さまをはじめ、今回の検討会の開催に当たり、ご協力いただいた沖縄県、鹿児島県の関係者の皆さまのご支援とお力添えのたまものであり、心より感謝申し上げます。